

内原遺跡の発掘調査

令和2年11月から令和3年1月にかけて、御前山地域野口地区で障害者支援施設建設に伴い、内原遺跡の発掘調査が行われました。古代の茨城を知る上で、たいへん貴重な成果がありましたのでご紹介します。



写真1 遺跡全景（写真上方は那珂川と那珂川大橋）

内原遺跡では竪穴住居跡が12軒見つかりました。古墳時代の住居跡11軒と奈良・平安時代の住居跡が1軒で、当時の人々の生活の痕跡です。

古墳時代の住居跡からは「S字状口縁台付甕」（略して「S字甕」）と呼ばれる特殊な土器が多数出土し、注目されています。「S字甕」は口縁の断面の形がS字のように屈曲しているのが最大の特徴で、名前の由来となっています。口縁の下にはイチジクのような形の土器本体が続き、その下に小型の脚台が付いています。土器本体の器壁は薄く、薄いところは5mmもありません。外側には「ハケ目」と呼ばれる細かい表面調整がなされています。



写真2 住居跡からの遺物出土状況
（左の壁際でS字甕、奥の壁際で十王台式土器が出土。ほかにもS字甕が出土している）

土器の表面は黒く^{すす}煤け、内面にはおこげ状のものが付いているものが多いので、火にかけて煮炊きにする実用の土器であることがわかります。器壁を薄く作っているのも、脚台を付ける（置いて火にかけたとき土器本体を地面から浮いた状態にするため）のも、熱効率を良くするためです。

このS字甕は、素焼きの器である「土師器」の一種で、名古屋市周辺など東海地方に分布の中心をもつ、古墳時代前期に特徴的な土器です。その存在は各地域における古墳時代の幕開けを意味します。実際、S字甕が出土する遺跡の近くには3～4世紀に造られた数少ない前期古墳が存在することが多いのです。

常陸大宮市内では、S字甕は今まで2例しか見つかっていません。いずれも破片で小祝地区で見つかり、1つは採集品、1つは梶巾遺跡（大賀小学校建設に先立って発掘調査がなされました）で出土したものです。市内では極めてまれな存在であるS字甕が、内原遺跡では完形に近い状態で多数出土したので、専門家からも大いに注目されています。



写真3 S字甕出土状況（写真2左壁際）

もう一つ注目される点は、S字甕と「十王台式土器」が1軒の住居跡から出土している事例が確認されたことです。（写真2）

「十王台式土器」は茨城県北部を中心に分布する弥生時代終末期の土器です。広口壺が主な形で、口縁部には櫛描きの波状文、頸部には縦方向の櫛描文で区画した間に横方向の櫛描波状文、胴部には捺糸文などを施す特徴的な土器です。

同じ住居跡から出土したと言っても、その住居で一緒に使われていたかどうかは不明です。

しかし、十王台式土器を使っていた弥生時代終末期と当地に古墳が造られるようになる時代にどのくらいの年代差があるのかという研究課題に大きな一石を投じる遺跡となったことは、今回の調査の大きな成果となりました。



写真4 十王台式土器出土状況（写真2奥の壁際）

今回の発掘調査では、たくさんの方々にご協力いただきました。今後とも地域の文化の礎を守る埋蔵文化財行政にご理解とご協力をお願いいたします。